

吉原幸子さんという詩人の、「喪失ではなく」という詩の中に、次のような一節がある。

大きくなって

小さかったことのいみを知ったとき

わたしは「えうねん」を

ふたたび もった

こんどこそ ほんとうに

はじめて もった

幼児期とは、自分が幼くあることの幸せも、贅沢さも知らず、それを大切に思うこともない、そんな存在のありようを指す言葉であるようだ。詩人は、その「まばゆさ」に気付いたとき、はじめて「幼年を生きる」ことが出来ると歌うのである。

子どもであった日の様々な出来事は、束の間の雪のように消えていくかに見える、見つめ直す視線にその輝きがとらえられ、その重さが体の一隅に感じられた

とき、再び、確かなものとして、私どもの日々を支配し始めると言うのだろうか。

夏の宵闇に、可憐な火花の曲芸を見せる線香花火の思い出は、その炎に、言葉も無く全身を吸われていた幼い日々をよみがえらせてくれる。そして、不思議なことに、私どもは、その日々が、あの人にも、この人にも共通であったことを疑わない。彼らの見入ったのが、赤い紙こよりであれ、或いは蘭草の花火であったとしても、そんなことはどちらでもよいのである。

それぞれの指に咲いた一度きりの「私の火花」それをまばたきも忘れて見つめた瞳の輝きは、否、そんな瞳の持ち主であった「私」は、すべての人々に共通なのだから。幼児体験が、普遍的であり、共有可能であるとは、まさに、このような意味においてなのである。(本田和子)

幼児の教育 第七十七巻第八号

八月号 © 定価二二〇円

昭和五十三年七月二十五日 印刷

昭和五十三年八月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

118 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします